

# 川崎病院 コロナ 奮闘記



川崎市立川崎病院通信  
くすの木 特別号

2020年、川崎病院は新型コロナウイルス感染症の対応病床の拡大・縮小（1速～5速のシフトチェンジ）を状況に合わせて、8回行ないました。

## <2020 冬> 1速→2速

2月初めの横浜クルーズ船対応ではニーズの大きさがわからず、困惑と混乱の中での受入、そして病院のあるべき姿が問われる初動となった。

集団感染した外国人旅行者への対応は、国籍の確認、大使館への連絡、未入国者の診療、完全防護具下での困難な外国語でのやりとり、陽性陰性同室の容認、日用品の買い物代行、子守、病床拡張（2速）など、通常診療のルールや範囲を遥に超えたものとなった。

## <春> 2速→3速→4速

3月の市中感染の急増（第1波）は春の人事交代時期を直撃した。数十名の医師が赴任できず、てんてこ舞いとなった。

救命病棟の一部使用（3速）、さらに全部使用（4速）とし、内科医と救急医による特別チームを作り対応した。

# コロナとの闘い、2020冬・春・夏・秋 そして、冬

## <夏> 4速→3速→2速→3速

7月の急増（第2波）は、冬春の経験と武器（感染防護具、核酸増幅検査）の充実により、大きな負担なく3速のまままで乗り切った。

## <秋・冬> 3速→4速→5速

10月からの増加（第3波）は爆発的であり、12月に4速、そして、翌年1月には一般病棟にも病床を置く5速までシフトアップした。当院の一般の3次救命機能は障害され、川崎市の医療崩壊寸前までいった。幸い、現在は患者減少基調になり、3速へのシフトダウンを考えている。

## 川病は逃げない

この長期戦、病院の方針を簡単な合言葉で職員に示し続けてきました。

【総力をあげて】【両立する】【入れない雇らない拡げない】【感染してても感染させない】など、方向を示す道しるべになったと思います。頻回のシフトチェンジは簡単なものではなく、必ず病棟閉鎖や縮小などによる人材のシフトを伴っています。病床拡張は、必ず他への歪み、負担、リスクを生じて



市立川崎病院  
病院長 金井 歳雄

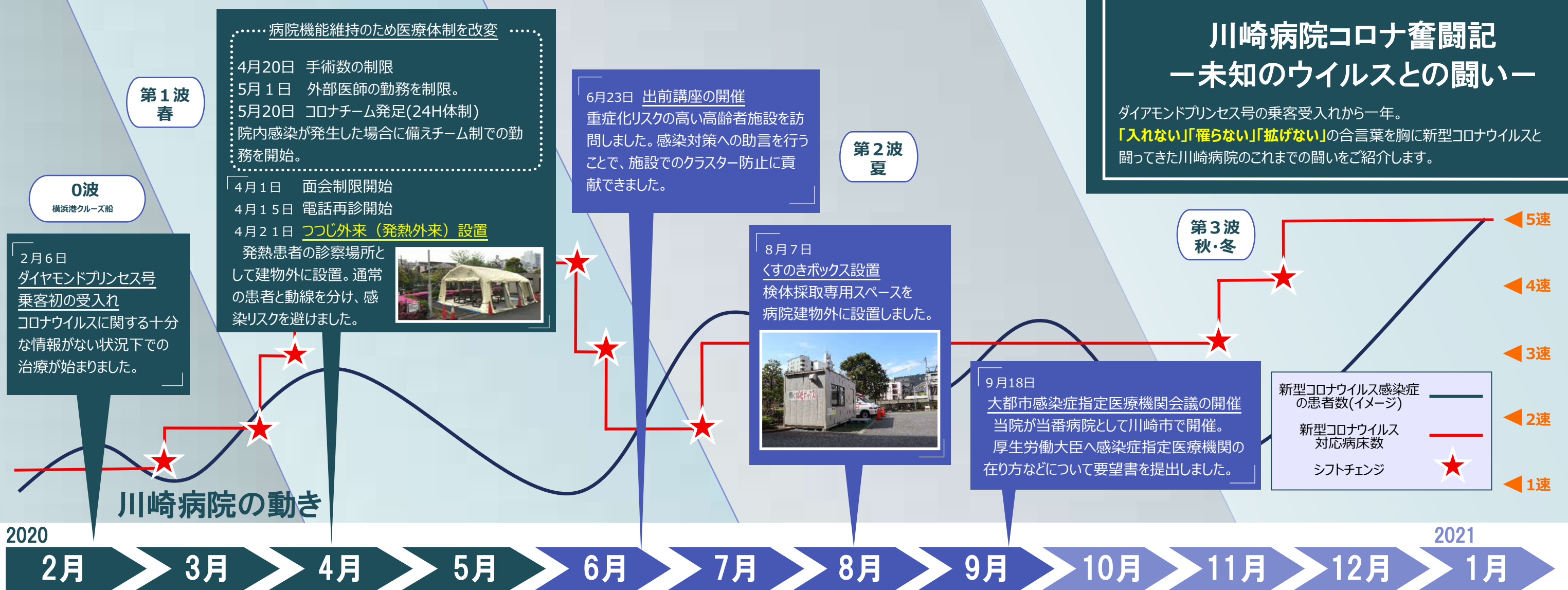
おり、適切な時期・バランスが重要でした。病床確保数が多いほど、病床利用率が低いほど、良いわけではありません。

当院の誇らしい実績は、県内有数の重症患者数(70例/1年間)と院内感染ゼロです。病院の無理難題に応じてついてきてくれた最前線からバックヤードまでの職員の使命感とスキル、そして勇気を褒め称えたいと思います。市民からの厚い支援は孤立感を薄めてくれて大きな精神的支えになりました。

本当にありがとうございました。しかし、闘いは続いています。

# 川崎病院コロナ奮闘記 —未知のウイルスとの闘い—

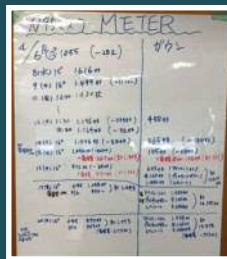
ダイヤモンドプリンセス号の乗客受入れから一年。  
「入れない」「罹らない」「拡げない」の合言葉を胸に新型コロナウイルスと闘ってきた川崎病院のこれまでの闘いをご紹介します。



## ○ 新型コロナウイルスと闘うための武器

### 資材不足との闘い

当院も十分なマスクやガウン類が確保できず、在庫メーターを作成し、各資材の残量を管理しています。



### LAMP法検査(遺伝子検査)の導入

緊急入院患者の全件検査  
玄関チェック  
つじ外来

コロナ疑いの患者を一般診療から隔離することで、院内に新型コロナウイルスを**入れない!**  
徹底した対策により、感染リスクを抑えています!

5月15日  
ECMO(人工肺)の追加購入

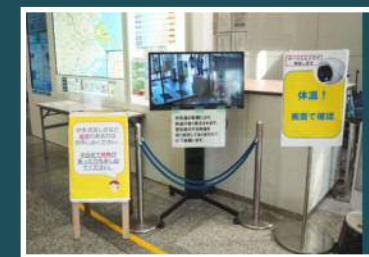
4月15日 ミンティ(空気感染隔離ユニット)設置



8月11日  
LAMP検査機を1台から3台に増強し、さらに毎日検査ができる体制を整えました。



9月8日 サーマルカメラを設置  
来院時の正面玄関での検温がスムーズになりました。



12月25日 紫外線照射装置を設置  
消毒作業に要する時間が減り、効率的な病床の運用と、資材の再利用が可能になりました。

1月30日 ミンティ再設置  
第3波により、重症病床を拡大しなければならなかった。

## 世界・全国の動き

3月24日 オリンピックの延期を決定

12月8日 英国でワクチン接種開始

2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月

2月27日  
小中高校に臨時休校の要請

3月11日  
WHOがパンデミックを宣言

4月7日 7都道府県対象に緊急事態宣言  
16日 対象が全国に拡大

7月22日  
Go to travel 開始

10月1日  
Go to eat 開始、入国規制が一部緩和

1月7日  
2回目の緊急事態宣言



# コロナと闘う 川崎病院の スペシャリスト



川崎市立川崎病院救命救急センター  
医長 齋藤 豊 医師  
2009年から現職勤務。日本DMAT隊員。  
〔専門分野〕救急医学、総合診療。救急センターで、軽症から重症まで様々な患者の対応をしている。

## No.1

2020年は救急医の立場から、1年を通して現場で新型コロナウイルスと対峙した。2月にはDMAT隊員としてダイヤモンドプリンセス号から患者さんを川崎病院に搬送した。当時はまだわかっていないことが多く、所詮風邪の一種ではないかという意見もあった。

自分の認識が大きく変化したのは3月末。新型コロナウイルス感染で入院していた30歳代の方の呼吸状態が急激に悪化するのを目の当たりにした時だった。気

は増えているが、新型コロナウイルスには感染したら危険だという認識は今でも変わらない。

以来、主に集中治療を要する重症の患者さんの診療を行ってきた。回復される患者さんでも大なり小なり後遺症を抱え、入院前とは異なる姿で退院されていく。抜管し人工呼吸器を外れた時に「・・・コロナをあまくみていた」と呟いた患者さんの後悔した表情は今も忘れない。

残念ながら新型コロナウイルス感染症に対

## ただの風邪なんかじゃない！

管挿管を行ったが既に重症肺炎・呼吸不全に至っていた。これはただの風邪なんかじゃない。その時は、もし自分が感染したら死ぬかもしれないと思ったほどだ。

やがて救命救急センターの病棟がコロナ病棟となり、コロナチームという内科-救急科の合同チームを組織して診療にあたったが、しばらくは夜中に中途覚醒する日が続いた。最前線の医療者は皆、見えない恐怖や不安と闘いながら働いていたと思う。

今では当時に比べて疾患に関する知見

する特効薬はない。軽症でも後遺症が残るという報告もあるので、後遺症を避けるにはそもそも感染しないようにするしかない。

一方で、マスク、手指消毒、人との接触・飛沫を避ける、など正しい知識で適切な感染管理を行えば新型コロナウイルスに感染する可能性を格段に下げることができるということはこの1年で実感したことだ。一人ひとりの地道な感染対策が医療の逼迫を緩和し、ひいては大切な人や自分自身の健康・命を失わないことに繋がると思っている。

## No.2

2020年2月から新型コロナ患者を受け入れはじめて、はや一年。早かった？いや、看護師人生で一番長い一年でした。

これまでの感染対策室の役割も一変し、「未知なる感染症に対して、迅速に立ち向かう・最良の医療の提供」とし、取り組みました。また未知なる感染症に対応する医療従事者への教育や

と発熱患者（コロナ疑い）の診療など、関連する部門との協議・調整も日々実施します。

市内で唯一の第二種感染症指定医療機関であり、公立病院の責務として、当院はこれまでも院内クラスターを発生させていません！これらの対応実績・経験を生かし、近隣医療機関や療養型施設への指導・教育にも注力しまし

民を守る責務を自覚し、感染管理にスペシャリストとして、意識の高い仲間（職員）とこれからも職員一丸となって戦っていきたいと思います！

## みんなをコロナから守るんだ！

精神的支えになれるよう支援もしました。最前線で戦う医療従事者（仲間）を感染させない！最良の医療の提供！は私にとって最大の使命です。

その他、保健所や外部医療機関との連携・調整など、入院依頼の調整も中心となり取り組んできました。国内や市内の感染状況を踏まえ、病床の拡大、一般診療に来院する患者様の安全を確保したトリアージ体制の確立

た。時には保健所からの依頼によりクラスターが発生した施設へ介入し、早期解決も実施しています。

当初は「新型コロナに立ち向かう！逃げない」この病院方針のもと、自宅に帰ることも出来ずに24時間休みなく新型コロナと対峙してきましたが、最近では週末を自宅で過ごす、そんな生活を取り戻しつつあります。

新型コロナに立ち向かう強い意思と市



川崎市立川崎病院感染症対策室

課長 井原 正人 看護師

1994年から現職勤務。感染管理認定看護師。市内医療機関や療養型施設を含め感染対策の向上に向けた取り組みを行っている。

〔発行元〕令和3年2月26日発行（特別号）

発行責任者：林 徳厚／編集：広報部会

事務局：川崎市立川崎病院庶務課 川崎市川崎区新川通12-1 電話：044-233-5521

<http://www.city.kawasaki.jp/32/cmsfiles/contents/0000037/37856/kawasaki/>